

小池 和男 著

『日本産業社会の「神話」』
——経済自虐史観をたぐす

願興寺 皓之

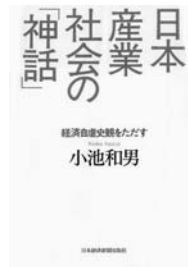
(南山大学大学院ビジネス研究科教授)

「自虐史観」とは、戦前における「自国の歴史の負の部分のことさら強調し、正の部分を通小評価する歴史観」を総称する呼称である。そうした歴史観のほとんどは戦後統制下で進められた戦前における日本国民の価値観の徹底否定政策に沿うものであり、戦前の歴史に対する客観的な評価を欠いたまま戦後教育によって蔓延したものである。また奇妙なことに「自虐史観」の論者の多くは戦後生まれで、実際にはそれを体験していないのである。

注目すべき本書の特徴の第一は、こうした「自虐史観」と同様に、繰り返して語られてきたがゆえに「真理」であるかのような衣をまとった通念が、労働、社会政策研究の領域にも蔓延しつつあることを明らかにした点であり、また第二に、それが労働行政あるいは企業人事政策との接点をもつことによって、誤った政策判断を誘導していることへの警鐘を発している点である。

そうした根拠に乏しい「真理」の修正は、原典あるいは原典が根拠とした事実を正しく観察し正確に理解する真摯な営みの上に初めて可能になる。小池和男氏は、これまでも現地現物を基本に丹念な聴取り調査を通してそうした「真理」であるかのように伝承されてきた多くの「神話」を検証しその真実を明らかにしてきた。その手法はまさにこうした真摯な努力の積み重ねによるものであった。本書も、小池氏ならではのそうした研究手法により到達したものであり、加えて、本書によって「神話」が社会に及ぼす危険性が明らかにされたことは、研究の有用性を示す上でも非常に意義深いものと言えよう。

本書では、先ず日本産業社会の「神話」を6つの視点から捉え、それぞれの検証と併せてそうした神話が誘導する政策リスクを明らかにし、さらに対処



●こいけ・かずお 法政大学名誉教授。

●日本経済新聞出版社
2009年2月刊
B6判・278頁・1890円
(税込)

法にも言及している。

第1章では、「集団主義の国、個人間競争の少ない日本」という神話をとりあげ、競争が激しければサラリーマンの査定幅は広がるという仮説をもとに日米比較を行い、日本は個人間競争が少ないという神話の誤りを査定幅に表れた実態から解明している。

第2章では、集団主義を根拠に「会社大事、仕事重視」であるとする神話を、国際的な意識調査をもとに反証するとともに、むしろ会社や仕事を醒めた目で見ている実態を明らかにしている。

第3章では、「年功賃金」は海外とは異質な日本社会の慣行から生じたものとする神話をとりあげ、ほんの一時期を除き18世紀から第2次世界大戦敗戦まで職務によるサラリーマンが続いてきた事実をもとに、そうした神話が誤解によるものであることを明らかにしている。

第4章では、「日本は長く働くことで競争力を保ってきた」という神話をとりあげ、労働時間は各国のくらしの様式とその差異を反映するものであり、さらに職種を問わず創意工夫を促すのであれば、単純な労働時間の長短の比較論は意味を持たないと指摘する。

第5章では、いわゆる三種の神器の一つである「企業別組合」をとりあげ、とくにイギリスの労働組合の特徴を詳細に紹介するとともにこれまでの研究成果も併せて、日本の組合と各国の組合との間に

は思いの外共通点があり、また OECD の勤続統計からヨーロッパの各国と同様に労働組合への社会的信頼が雇用不安の軽減に役立っていることから、「企業別組合」を特異な存在とする見方は誤りであることを解明している。

第6章では、企業の研究開発に対する政府の介入が、個人の創造的な研究を阻害しているという神話をとりあげている。そこでは日本ほど政府資金に依存していない国はないことを国際比較統計によって明らかにし、政府の役割を過大に評価する神話を払拭している。

終章では、先ず、こうした「神話」による誤解による企業の方針が働く人にもたらした損害にふれている。小池氏は多くの損害の中でも第1に「短期化の弊害」を挙げる。すなわち個人間競争が乏しいとする神話は短期の業績に基づくサラリーの格差拡大政策を誘導し、その結果本来必要な中長期の人材育成や長い期間と膨大な資金を要する真に創造的な研究が軽視され、それらが競争力の減退をもたらしていること。また第2に本書冒頭にふれられている「集団主義」神話による海外企業活動での損失、すなわち集団主義に基づく少ない格差が、海外事業における人材形成を阻害し競争力の低下を招いているという問題をとりあげ、その解決に向けてグローバルに適応できるサラリーすなわち現在米国でふつう

に行われている「やや広い範囲をもつ社内資格給」としてのサラリー方式と、技能の向上を反映する査定つきの定期昇給によって高度な人材育成を促す方式を導入すべきことを示唆する。次に、政府の関与が創造的研究へのマイナス効果をもたらしているという神話によって、研究開発費に占める政府資金の低さが見過ごされている損害にふれ、創造的でリスクの極度に高い研究を長期にわたって推進するためには政府資金以外にその役割を担うものはないと、改めて政府資金の重要性を指摘している。

最後に小池氏は、こうした神話が生まれる原因を、判断の基準とすべき他国の状況のとらえ方に正確性を欠いている点に求め、したがって他国の冷静、的確な状況把握に基づく他国と日本を直接比較した研究結果の活用の大切さを強調している。

本書は小池氏の深い学術的研究成果の粋を集めたものでありながら、文章の読みやすさもさることながら、各章に配置された数多くの興味深い歴史上のエピソードによって、学術書特有の息苦しさを感じさせることなく読者を自然に引きつける。小池氏独特の仮説の立て方やそのために用いられる資料、情報の利用に関する数々の批判を無視すべきではないが、そうした議論を超えて、小池氏が本書を通して学術研究さらには産業社会に発信する警鐘を真摯に受け止めるべきではないだろうか。